

平成 25 年度
広島市専門家評価
評価報告
(三入中学校)

平成 26 年 3 月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会

評価報告について

このたび、広島市学校評価システム専門家評価「評価委員会」（以下「本委員会」という。）では、専門家評価（専門家による第三者評価）を実施し、ここに評価報告を取りまとめました。

この専門家評価は、「広島市学校評価システム第三者評価検討会議」の最終報告書で提言された実施方法等に基づいて実施しています。

専門家評価は、各学校の学校経営や教育活動の改善に向けた取組とそれに対する教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して意見・提言を行うことによって、学校評価の目的を果たす役割を担うものです。そのため、本委員会は、学校における自己評価活動（計画・実践・評価・改善）について専門的見地からより客観的に評価することと、学校に対しては学校経営や教育活動の改善について、また教育委員会に対しては学校への支援について、意見・提言を行うことを役割としています。

本委員会では、今年度、専門家評価を希望した広島市立小学校1校と広島市立中学校1校を評価対象校に決定し、実施しました。本委員会において、学校の状況に応じて評価の目的や評価する項目を定め、学校経営や学習指導等に専門性を有する学識経験者及び退職校長を含む評価チームを編成して、昨年10月から学校への訪問調査等を行い、その後、学校と報告案に基づく協議を行い、この評価報告を作成しました。

この評価報告にある意見・提言を踏まえ、学校での主体的な学校経営や教育活動の充実・改善に向けた取組が進むとともに、学校の取組が促進されるよう、教育委員会の適切な支援が行われることを期待します。

平成26年3月

広島市学校評価システム専門家評価

評価委員会 委員長 林 孝

副委員長 曽余田 浩史

副委員長 高妻 紳二郎

I 評価目的

三入中学校が生徒の自尊感情及び学力を高めるために取り組んでいる「生徒指導の三機能を生かした授業づくり」やその指導の在り方とともに、地域の学校として信頼される学校づくりのための学校経営・組織マネジメントの状況を評価し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

II 評価項目

- (1) 生徒の状況
- (2) 学校運営の状況
- (3) 授業の状況
- (4) 生徒指導の状況
- (5) その他の教育活動の状況
- (6) 環境・施設の状況
- (7) 小学校及び家庭・地域との関係

III 評価方法・作業

1 評価手法

今回の評価方法としては、「II 評価項目」に関する情報を、学校及び教育委員会から提供を受けた資料、管理職員及び教職員からの聞き取り、授業等の観察によって収集し、それらを総合的に分析した。

2 データ収集方法

データ収集対象	方 法
学校管理職員	聞き取り、資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）
教職員	聞き取り、授業等の観察
生徒	授業等の観察、グループインタビュー
地域の方	聞き取り
三入中学校区の各小学校長	聞き取り
その他（教育委員会）	資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）

3 作業の経過

時期	内 容	実施主体
4月	専門家評価実施の通知、希望の受付	教育委員会
5月	参考資料の収集・分析、対象候補校の選定	教育委員会
6月	参考資料の収集・分析、対象候補校からの聞き取り（6/7） 対象候補校の選定 評価委員会（評価対象校の決定） ※ 電子メールによる会議	教育委員会 評価委員会
7～9月	評価対象校から希望等の意見聴取（7/12） 評価委員会（評価目的、評価項目の決定、評価チームの編成） ※ 電子メールによる協議	評価委員会
10～11月	学校訪問調査（教職員からの聞き取り、授業等の観察 他）（10/2） 評価チーム会議（評価計画、今後の予定）（10/23） 学校訪問調査（教職員からの聞き取り、授業等の観察 他）（11/25）	評価チーム
12月	評価チーム会議（評価報告案作成） ※ 電子メールによる会議 学校及び教育委員会から評価報告案作成に向けた意見聴取 ※ 学校訪問による意見聴取	評価チーム
1月	学校及び教育委員会から評価報告案に関する意見聴取	評価委員会
2月	拡大評価委員会【評価委員会・評価チーム会議】（評価報告案他） (2/10)	評価委員会・評価チーム

4 評価者（評価チーム）

チーフ(評価委員)	曾余田浩史（広島大学 大学院 教育学研究科 准教授）
評価専門委員	財津 伸子（比治山大学 非常勤講師、元 中学校長）
評価専門委員	瀧口 典子（元 中学校長）

IV 評価報告

1 評価・分析結果の概要

I 総合的な状況

生徒指導上の課題が続いてきた三入中学校は、「平成25年度広島県小・中学校生徒指導集中対策指定校」の指定を受け、落ち着いた学習環境づくりに取り組んできた。専門家評価を行った12月の時点では、一部の生徒に徘徊等が見られるものの、3年生が落ち着いてきたため、学校全体として通常の学校生活が保たれてきている。生徒は、積極性に欠ける印象もあるが、まじめに学校生活に意味を見出している者が大多数のようである。3年生の指導の経緯等から落ち着いてきている現状は、教員の忍耐強い取り組みや頑張りの成果であり、評価されるべきである。

現在の三入中学校は、落ち着いた状態をさらに進めながら、授業研究に取り組んで、学力向上を図って生徒の自己肯定感を高め、よい循環を作ろうとする入口に立っている時期にある。

ただし、これから先の学校経営の方策について、一致した方向性が明瞭になっていない。各教員は現在の良好な状態が崩れる不安を持っており、生徒指導への対応を優先せざるを得ないため、今後の学校づくりについてビジョンが持てないようである。生徒指導に追われていた状態から、新しい方向に踏み出す切り替えの段階であるから当然ともいえる。しかし、この時期は、小さな一歩でも、とにかく確実にしっかりと取組を推進することが、学校の雰囲気を変え、教員の自信を育てるにつながるので、その推進役となる教員のリーダーが必要である。

さらに、学校のマイナス状況の要因を、「安佐北中学校（広島中等教育学校）」不合格生徒の入学による自己肯定感の低さだと考えている教員が多いが、学校として、のこと以外の要因は取り上げていない。また、「安佐北中学校（広島中等教育学校）」不合格生徒の入学の実態や「安佐北中学校（広島中等教育学校）」の今後の影響等について、明確に把握していないように見受けられる。

「安佐北中学校（広島中等教育学校）」の影響への対応ではなく、入学前に生徒たちが抱いていた期待に応え、本校生徒としての誇りと自己肯定感を育てることが大切である。そのために、三入中学校独自の特色ある学校づくりや教育活動など、学校のビジョンを明確にする必要がある。

II 各領域について

【生徒の状況】

- ① 現在の生徒の状況について、教員のとらえはほぼ一致している。
 - ・ 昨年度よりも良い。
 - ・ まじめに頑張っている生徒が多くいる。
 - ・ 自己肯定感が低い。
 - ・ この状態は一時的な小康状態であり、今後いつ落ち着かなるかわからない。
- ② 大半の生徒は容儀、行動面では落ち着いて過ごしているようである。
 - ・ 登校時、生徒の声は大きくはないが、比較的挨拶をよくする。顔を上げて中には笑顔も見えた。挨拶運動を一緒にしている地域の人にもよく挨拶をしている。服装が大きく乱れている生徒はわずかで、その生徒たちも挨拶は返してくれた。
 - ・ ロッカーに教科書等の学用品が雑然と押し込んであり、丁寧な扱いはできていないが、破損や甚だしい傷みはなく、物品の扱い、教室の管理など、常識的な行動がとれているようである。
- ③ 3年生の授業では、1割程度の生徒が授業に参加できていない様子である。徘徊の兆しもある。遅刻した生徒が現れると2～3人が教室を出るが、他の生徒は学習を続けている。授業でない教員の指導は遅刻した生徒とその友達たちへの対応に費やされている。
- ④ 現3年生について、1年生時からの一貫した継続的な指導により、昨年度の後半から集団としての成長が見られるようになった。

- 修学旅行の時に、自分たちでルールを決めるなど自動的に取り組んだことに、自己の成長を感じているようである。
 - 生徒会の生徒（3年生）は、生徒同士の声かけ、活動の大切さを感じていた。徘徊する生徒たちに、生徒がもっと注意するとよくなると考えており、その生徒たちとかかわる意識がある。
 - 3年生が、徘徊する生徒たちに同調せず、しかし、その生徒たちにかかる気持ちをもっていることは、指導の成果であり、3年生の生徒が学校生活の意義をそれぞれに見出していることを感じさせる。
- ⑤ 生徒が授業以外で自主的に学び合っている姿が見られるようになっている。ただし、こうしたことが学校として価値づけられていないようである。
- ⑥ 専門家評価の日は、1. 2年生はテストであった。その表情は全体的に少し元気がない印象であった。

【学校運営の状況】

- 教職員は礼儀正しくまじめな勤務態度である。
- 学年で生徒を育てようという意識があり、各学年内の協力が進んでいる。インタビューでは各主任等は担当の役割をしっかりと果たそうとしている。しかし、今後の学校全体のビジョンを尋ねると、考えるゆとりがないとの回答が多い。
- 校長は学力向上を第一の課題としており、教員は校長の目指すところについて知っているが、学力向上にすぐに取り組むべきだという意見と、その前に生徒指導が必要だという意見に分かれている。教頭も学力向上に取り組むべきという意見をもっているが、それを提示する機会を得ていない。
- 校長、教頭は今後の取組について方向性を持っているが、それをどこが（誰が）学校全体の取組として推し進めているか不明である。経営委員会は意見交換できているようであったが、各部等からの報告・調整が中心的な内容になっているようである。
- 新任者が8名いるが、学校の状況についてしっかりと把握しないままに、すぐに生徒対応に入らねばならない状況であり、本校組織の一員として実態把握を共有しないまま実践が任されている。新任者に、学校の状況や学校経営計画を説明する機会や地域訪問の機会を別に設け、学校が組織として動く力を高める必要がある。
- 学校評価について、平成25年度の学校経営計画の短期経営目標やアンケート項目は概ね適切に設定されているものの、中間評価では、アンケート結果の集計などのチェック作業に留まっており、その結果をどう分析・解釈し、子どもたちの変容を確認し、何を成果として価値づけるか、次にどうするかが議論されていない。後述するように、このアンケート結果からは授業改善の手がかりを読み取ることができる。授業改善の実践を積み上げていくためには、P→Dで留まらず、C→Aを実質的に機能させる必要がある。
- 校長は教員の疲労感に共感的理解を示している。また、生徒にも積極的にかかわろうとする姿勢が見えた。ただし、生徒指導などに校長が動きすぎると、教頭や他の教職員の出所が難しくなる可能性もある。

【授業の状況】

- 授業は教師の説明によって進められている。生徒はやや受け身的に授業に参加している。
- 3年生では、プリント学習を取り入れることによって、学習の定着が図れているとの報告がある。1年生の学習プリントの掲示等からも、「書いて学習する」ことは現在の生徒に適しているようである。

- ③ 授業研究では、今年度、「特別支援教育推進校（広島市）」の指定のもと、「特別支援教育の視点に立った授業改善に取り組み、すべての生徒にわかりやすい授業に取り組む」ことを掲げている。しかし、研究主題を授業ではどのように具体化しているかについては、教員から明瞭な取組が聞かれなかった。
- ④ 「平成25年度学校評価アンケート（中間）」によると、生徒は、「本時のめあて」についてなど、教師が自己評価しているよりも高く特別支援の視点に立った授業を感じとっており、生徒自身は授業で頑張っていると思っている。このことは、教師の指導を信頼していると解釈してもよいのではなかろうか。しかし、生徒は「認められ褒められていること」については、教師が意識しているほどは感じっていないようである。教師がさらに積極的に、認めたことを伝えていくことが必要である。

【生徒指導の状況】

- ① 「平成25年度小・中学校生徒指導集中対策指定校（広島県）」の指定を受け、挨拶運動（生徒会、学校協力者会議）、校内巡視、朝会、暮会（つぶやきノート）、生徒指導委員会、特別支援委員会、小中連携等に取り組んでいる。
- ② 生徒指導主事がよく動きリードしており、校長と教頭、教頭と教員の連絡が速く、生徒の問題行動に対応できている。また、廊下待機、スクールサポート指導員等との連携等、役割分担が行われている。スクールサポート指導員、スクールソポーターが課業時間中にいることで、徘徊が抑えられ、教員が授業に集中しやすい環境ができてきている。
- ③ 学校のマイナス状況の要因を、「安佐北中学校（広島中等教育学校）」不合格生徒の入学による自己肯定感の低さだと考えている教員が多いが、学校として、要因についての分析は行われていない。また、「安佐北中学校（広島中等教育学校）」不合格生徒の入学の実態や「安佐北中学校（広島中等教育学校）」の今後の影響等について、明確に把握していないように見受けられる。
- ・ 不合格で入学してくる生徒数、受験の動機等についてのとらえが、中学校と小学校で違う。（トップクラスで受験をしていない児童は多くいるなど）
 - ・ 小学校長の話によると、不合格者の全員が不合格によって自己肯定感が下がっているわけでもないことを考えると、学年全体の意識を大きく阻害するものとはすぐには感じられない。ただ、不合格者がいると、担任としては、意識せざるを得ない状況になると思われる。

【その他の教育活動の状況】

- ① 3年生の学年団は、生徒相互がつながること、自治の力をもてるることを目指して3年間粘り強く取り組んでいる。3年生になって効果が少し感じられるととらえている。
- ② 2年生の学年団は、集団の決まり、皆を意識して生活するようになることを指導している。1年生で少人数学級であったが2年生から37～38名の学級になり、指導が難しくなった。
- ③ 体育祭では縦割り活動で生徒が活躍し、教師も評価している。ただし、文化祭では3年生が範を示したと評価している教員と評価していない教員とがおり、実態が不明である。
- ④ 部活動、学校行事、縦割りの活動等に取り組んでいるが、インタビューではこれらの取り組みへの教師のビジョンや評価があまり聞かれなかった。また、学校便りや学校紹介でも、部活動の大会等での成果、挨拶運動以外には、日常の活動の様子などについてあまり紹介されていない。
- ⑤ 教室に、学校目標や学年目標、班活動の取り組みなどの掲示物がないか、少ないように感じた。「学級集団・学年集団の形成」「自分たちでつくる学習環境」にとって目標は大切である。

【環境・施設の状況】

- ① 時計の設置、コンセントの補強、廊下の壁紙の貼り替え、廊下の掲示物等、学校内の環境を生徒にとって良好に保つよう取り組まれている。黒板、教室の床等、古いが掃除されている。
- ② 学年によっては、教室、掲示物、ロッカー等が雑然としていた。生活し学ぶ場所なので指導が必要だと感じた。
- ③ 上靴の放置が気になった。誰か一人でも放置を始めた時、初期の変化を見逃さず、指導しないと直らない。
- ④ 生徒用の個人ロッカーが作りつけられておらず、小さいものを置いて間に合わせているため、荷物が入らない。
- ⑤ 校舎、施設・設備が学校の規模が大規模であった時のままで、職員数が少なくなった現状では管理上と生徒指導上の負担となっている。
 - ・ 校舎のつくりが複雑で死角が多く、生徒指導、安全部での不安がある。特に東校舎（中でも内階段、調理室の外側の廊下）、プールの脱衣室のフェンス側はそばに行かない見えない。
 - ・ 照明の暗いところがあり、安全部が心配であり、気分も暗くなる。（音楽室前廊下・視聴覚室前廊下の突き当たり）

【小学校及び家庭・地域との関係】

- ① 小学校（三入小学校、三入東小学校、大林小学校）との連携について、校長同士の話はできていると感じた。小学校の校長も協力を惜しまないと発言していたので、さらに協力体制を強め具体策を立てて進めたらよいと思う。
 - ・ 小学校の校長からの聞き取りでは、入学前の児童は中学校では部活と英語を楽しみにしていると聞いた。入学後、中学校がその期待に応えていないなら、生徒の活気や意欲を減少させ、不満を持つ生徒も出てくると感じた。
- ② 地域との連携が、一部の方との連携にとどまっているようで、地域全体の組織とのつながりを感じられない。
 - ・ 地域の方の談話より、学校はよくなつたと、現在の状況を評価している。また、あいさつ運動に参加してくださっている。
 - ・ 学校協力者会議が積極的にサポートしてきた経緯がある。
 - ・ 地域の保護司が頻繁に学校に来てくださっている。
 - ・ 桐陽台団地の自治会（町内会）、及び地域の自治会（連合町内会等）、地域全体を網羅している団体との連携はどのようなだろうか。学校協力者会議とともに、地域の各組織との連携も必要ではないだろうか。
- ③ P T A、保護者の組織的な活動や、保護者との連携が不明である。
 - ・ 今回の専門家評価ではP T Aの方のお話が聞けなかった。
 - ・ 次の点が疑問である。P T Aは挨拶運動に参加しておられるのか。保護者は学校の現状をどのように感じておられるか。保護者との連携について学校はどのような取組をしているか。

2 意見・提言

① 本校生徒としての誇りと自己肯定感を育てるための学校のビジョンの明確化

「安佐北中学校（広島中等教育学校）」の影響への対応よりも、入学前に生徒たちが抱いていた期待に応え、本校生徒としての誇りと自己肯定感を育てることが大切である。そのために、三入中学校独自の特色ある学校づくりや教育活動など、学校のビジョンを明確にすることが必要である。三入中学校の自慢できること、三入中学校しかできないこと、三入中学校が目指すことなどの取組があれば、生徒は誇りを持って通学できる。子どもがはつらつと学校へ行けば、保護者からの批判も減り協力も得られると考えるべきであろう。

本校生徒としての誇りと自己肯定感を育てるには、(a) 学力向上の取組だけでなく、(b) 部活動・縦割り活動・学校行事の活性化を進める、(c) 評価・広報を進める（年一回は部活動の保護者会や参観を設ける、合唱祭に合わせて発表展示を行う、卒業式の飾りつけ・修学旅行の報告会などに縦割り活動を組み込むなど）、本校の特色ある教育づくりの面からのアプローチが必要である。

そのために、校長は、教員が部活動や行事等の指導に取り組む時間と気持ちのゆとりを作り出せるよう、教員の勤務体制について（現在も厚く配慮しているが、さらに）工夫することや新しい取組についての視察・研修を積極的に取り入れることなどが期待される。

② ビジョンを推進する力をもつ校内組織の必要性

新しい取組を強力に推進していく柱となる校内組織を機能させてほしい。経営委員会の指示・提案・実施・評価機能を大きくするなど、校長の指導の下にビジョンを学校全体のものにして推進する力をもつ組織が必要である。

③ どの教科にも共通させた学習の方法の導入

授業について、ごくシンプルなもので、どの教科にも共通させた三入中学校の学習の方法（授業のプレ・ポストテスト、授業の発言話型、ノートの書き方等、生徒が実行するものなど）を決めて取り組み、生徒に「学習に力を入れている学校だ」という意識を育てることが有効ではなかろうか。

教師・生徒のアンケート等の結果を見ると、授業の工夫として次のことが有効なように思われる。

- ・ 繰り返し学習など定着のための学習活動をさらに積極的に授業に組み込むこと。
- ・ 授業のまとめを教師のまとめとともに、生徒に発表させるなどして、生徒自身に学習成果や取組のプラス面を意識させること。

話し合いや表現させる授業にすることを急がず、各教師の工夫で効果が出ていることを生かして、プリント学習やノートづくり、書かせること等を全教科の学習に取り入れて全校的に継続してみてはどうだろうか。

④ キャリア教育の充実

キャリア教育を充実させることによって、中学校3年間で何を学び、将来へ向かって自らの夢を実現させるためにどうするか、自分の進路をしっかりと考える力をつけることが重要ではなかろうか。1年生の時に校長面接などを行い、中学生としての自覚を持たせ、社会に出た時に必要な力や礼儀などを身につけさせることが大切だと思われる。

⑤ 小学校（三入小学校、三入東小学校、大林小学校）との連携の推進

小学校（三入小学校、三入東小学校、大林小学校）との連携について、校長同士の話はできていると感じたが、具体策まで詰められていない。また、三入中学校の教員は、小学生の受験の動機、入学前の小学校の児童たちが三入中学校に対して抱いている期待や楽しみ等、小学生・小学校の実態（とりわけプラス面）を明確に把握できていない状況がある。小中の教員同士が交流し互いを知る機会を設けるなど、さらに協力体制を強める必要がある。

IV 教育委員会への要望

- ① 生徒指導加配、スクールサポート指導員、スクールソーターの配置によって生徒を落ち着かせる指導ができてきており、本校が生徒指導対応をしながら学力向上に取り組む過渡期であるため、これらの支援を来年度も是非継続することが必要である。
- ② 設備について、教室のドアや廊下の照明の改修、必要な荷物が入る大きさの個人ロッカーの設置が必要である。
- ③ 施設について、校舎のつくりが複雑で死角が多く、生徒指導・安全面での不安が軽減されるよう何らかの支援が必要である。
- ④ 今後、安佐北中学校（広島中等教育学校）との連絡会を作ることはできないだろうか。安佐北中学校は、今後、広島中等教育学校として全県下からの受験者の増加を目指すということであり、そのねらいが実現すれば地域の小学校からの受験状況も変化すると思われる。広島中等教育学校の今後の見通し、広島中等教育学校の受験状況等について、近隣中学校がはっきりと実態を把握できるように、小・中学校の校長連絡会等での情報交換を行うことが必要である。